

社会学理論を見つける : 理論と実証研究の対話の中で

高橋, 優子

<https://hdl.handle.net/2324/7388817>

出版情報 : 大学院からはじめる社会学研究 : 問いを鍛える作法 : 三隅一人教授退職記念論集, pp. 16-32, 2025-10-01. 三隅一人教授退職記念論集刊行委員会
バージョン :
権利関係 :



社会学理論を見つける —理論と実証研究の対話の中で—

高橋 優子

◎本章のねらい

学部時代から学際的分野で学び、自分が立脚する特定のディシプリンの素地が無いまま博士後期課程に進んだ筆者が、博士論文および単著を書く際に、援用できる社会学理論を模索し、その理論と実証研究のバランスを追求した試行錯誤の経験を紹介する。それにより、学際的分野から社会学の世界へ飛び込もうとする人たちにとっての参考事例を示す。

◎とくに読んでほしい人

- ▶ 特定のディシプリンでの訓練を受けずに大学院に進学し、社会学で、あるいは社会学の理論を援用して、研究をしたいと考えている人
- ▶ 探究したいテーマや問いはある程度定まっているが、理論的素地に自信がなく、理論的枠組みや分析手法を模索する人

1. はじめに

2019年3月、私は博士論文を提出し、無事に博士号を授与された。博士論文のテーマは、在日コリアン（在日韓国・朝鮮人）被爆者の被爆者運動。日本が朝鮮半島を植民地にしていた時代（1910～1945年）に、生活のためや動員のために日本へ渡り、あるいは日本で生まれ、そして1945年に広島・長崎で被爆した朝鮮半島出身者がいた。その数は7万とも10万ともいわれる。彼らのうち、日本の敗戦後、あるいは朝鮮の解放後にさまざまな事情で日本に残ることになり、のちに、日本に住む同胞と、朝鮮半島、すなわち現在の大韓民国もしくは朝鮮民主主義人民共和国（本章では、日本で今日広く使われている呼称を採用し、それぞれ「韓国」「北朝鮮」と呼ぶ）に帰国した同胞たちのために、医療的、経済的、法的救済を実現する運動に携わってきた人たちがいる。こうした彼らの運動について4つの事例の実証研究を通して考察したのが、私の博士論文であった。

なんとか標準修了年限の3年で博士後期課程を終えたが、在籍中も、そして今振り返っても、自身の問いの立て方——つまり、解き明かしたい疑問や事象の設定——や理論的枠組みに自信がないまま博士論文を書き上げたとの感を拭えない。それはひとえに、学部時代から学際的分野で学び、自分が立脚する特定のディシプリンの素地が無いままここまで来たことが原因であろう。

本章では、そんな私が博士論文を書き、その後さらに書籍化するまで、問いと理論を模索し、試行錯誤を繰り返した道のりを振り返る。その中で、私が向き合った3つの課題と、それらについての自身の経験を、似たような悩みを持つ読者にとっての参考として紹介する。しかし、これら3つの課題は必ずしも段階的なものではなく、一つの研究プロジェクトのどの段階でどの課題にぶつかっても、不思議はない。また、ここで示す私の経験は、成功例というよりは試行錯誤の軌跡である。したがって、読者が倣える特効薬ではないことを断っておかねばならない。とはいえ、本章は、特に次のような人たちにとって、何らかの参考、あるいは反面教師になるであろう。

- ① 特定のディシプリンでの訓練を受けずに大学院に進学し、社会学で、あるいは社会学の理論を援用して、研究をしたいと考えている人
- ② 探究したいテーマや問いはある程度定まっているが、理論的素地に自信がなく、理論的枠組みや分析手法を模索する人

2. 博士後期課程に入学するまで

そもそも、なぜ博士後期課程入学時に特定のディシプリンの素地がなかったのか。これを説明するためにも、私の学術的関心の始まりと博士後期課程入学までの経緯を回顧しておく必要がある。私は高校生の時、日本の植民地支配の歴史を巡って対立と歩み寄りを繰り返す日韓関係に関心を持った。当時学んでいたウェールズの全寮制インターナショナル・スクールで、韓国出身の友人から、彼が韓国の学校で日本の植民地支配について教わった事を聞かされ、「ぼくは自分の日本の友人は好きだけど、日本という国は嫌いだ」と言われたことがきっかけであった。本やテレビなどのメディアではなく、自分の友人に面と向かってこう言われたことに、強い衝撃と悲しみを覚えた。それ以来、「日韓両国の人たちがどのように植民地時代の歴史に向き合い、共に未来志向の関係を築けるか」という問題意識が私の中に染み付き、大学時代から今に至るまで、常に私の学問的関心の根底にある。

卒業後、イングランドのシェフィールド大学に進み、東アジア地域研究（と音楽学）を

専攻した。東アジアについてきちんと学び、日韓の歴史認識問題について自分自身がどう考えるか、学問として追究したかったのである。地域研究はいわゆる学際的な分野で、日中韓を中心とした北東アジアの歴史、政治、経済、哲学、宗教、社会、文化など、さまざまな領域について学んだ。その後、修士課程としてロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ校で音楽学を、リーズ大学でアジア太平洋地域研究をそれぞれ学んだ。

リーズ大学に提出した修士論文では、1945年の原爆投下に主眼を置いた広島「平和教育」なるものの現在の状況を、現地・広島の公立高校と私立高校でのフィールドワークを基に考察した。被爆地・広島で謳われる「平和」が韓国をはじめとした他国で受け入れられるとは限らないと考えていたので、未来を担う世代が広島で受ける「平和教育」がどのように構築・実践され、現在どのようなもので、そしてこれからどのようになればよいかを論じたのである。この根底にもやはり、歴史認識問題への関心があった。同時に、修士課程でも学際的地域研究のフィールドに身を置いていたため、「自分の専門分野はこれだ」と言える特定のディシプリンは無いままだった。

英国での大学生活は期待以上に充実したものであったが、ある種のジレンマも感じていた。それは、自身の知識と経験の乖離である。日韓関係に関心を持った時、私は英国に住んでいた。そして、英国の大学に進んで東アジアについて学んだ。日本でも韓国でもない国で東アジア研究を始めたことには、日韓、あるいは東アジアの社会の中に根強くある特定の思想なり言説なりに必要以上に影響を受けることのない、全くの第三者の立場から学べたという利点があった。しかし、それは同時に、日本や韓国の「生の社会」を知らず、その社会で生きる実体験を持たないまま東アジアについて学び始めたということでもあり、大学で学ぼうち、現地の実社会を知らないまま本からの知識だけで書生じみた議論をしているにすぎないのでは、という違和感を抱くようになったのである。

学問をすることは好きだったが、知識と経験の乖離を感じていたことから、学問以外の道で、そして東アジアの実社会で、日韓関係について何か自分に出来ることを見つけたいと考え、修士課程修了後に広島に拠点を移し、国際交流や在日コリアンと日本の市民の交流などに関わる市民活動をしていた。しかし、数年経って、やはり学問の世界が好きだと気づき、博士課程に進むことを決めた。2015年の春であった。

課題 1) 社会で疑問に思った事や知りたい事を突き詰め、研究の問いを定めよう

まずは自分が情熱を持って（しかし研究者として適切な距離も保ちながら）取り組めるテーマを、妥協せず見つける。

3. コリアン被爆者と日本人の関係性への関心

博士課程進学を考える際、英国、韓国、日本といった複数の国の大学を探したが、後述する研究テーマ、これまでの経歴（東アジアについて日本の大学で学んだ経験がなかったこと）、その当時の生活環境などいくつかの事柄を総合的に考えた結果、九州大学の地球社会統合科学府で学びたいと考えた。入学試験で研究計画書を求められることを知り、まずは入学試験のため、そしてそれ以上に入学できた後の研究のために、数か月にわたり先行研究や社会学理論の文献を読んだ。それまで特定のディシプリンを専門として学んだことのなかった私は、ここで社会学に焦点を絞って勉強を始めた。指導教員に希望していた直野章子先生（現・京都大学教授）が社会学者であったこと、それまでの大学（院）での学びでも、常に人と社会の関係に一番の関心を持っていたことが、その理由であった。

研究テーマは決まっていた。「在韓・在日コリアン被爆者の日本に関する認識と、その形成における日本・日本人との距離感の影響」であった。このテーマに至る契機となった日韓両国での体験があった。広島で被爆した朝鮮半島出身者のうち、最も多くの人たちは、韓国慶尚南道の陝川（ハプチョン）という町の出身者であり、陝川には、1996年に陝川原爆被害者福祉会館という施設が建てられ、日本政府から被爆者健康手帳を交付された在韓被爆者の人たちが入居している。博士課程進学を考え始めるより前のこと、この福祉会館を訪れたことがあり、その際、意外なことに被爆者の方たちは「旧宗主国・日本」から来たこの私を、「懐かしい広島」から訪ねて来た孫娘のように温かく迎え入れ、広島弁で話しかけてくれたのである。また、当時、広島市の在日コリアンが多く住む地区にあるデイサービスセンターでボランティア活動をしていたのだが、そこで知り合った在日被爆者の方たちも私を慕ってくれているように感じていた。

コリアン被爆者たちの日本に関する認識は、強い怒りや憎しみであったりする場合が多い一方で、日本人に対する親近感や、幼少・青年期を過ごした日本への望郷の念を抱く人もいるなど、一元的でなく複雑である。こうした一見矛盾する認識には、幼少期に受けた差別の程度、日本人との個人的な関わりの有無、戦後の補償などを求める運動への参加の有無など、日本や日本人との距離感が影響していると考えられる。博士課程の研究では、これまでに残されてきた手記や証言および新たに行うインタビューを資料に、このように複雑な在韓・在日コリアン被爆者の日本に関する認識と、その形成に日本や日本人との距離感がどのような影響を与えてきたのかを分析する。これが、研究計画書にまとめた研究概要であった。

この時に骨を折ったのが、理論的枠組みの設定であった。先述したように、私には社会学の基礎が無かった。このテーマを探究するのに適した社会学理論にはどんなものがあるのか、そしてどのような分析手法があるのか、全く見当もつかず暗中模索の中で、最終的に研究計画書で取り上げたのは、現象学的社会学で知られるアルフレッド・シュッツの他者理解論であった。

シュッツは、他者理解で重要なのは同じ空間と時間の中で「意識の流れ」を共有する「我々関係」を結ぶことであると論じた (Schutz 1932=1967: 164)。さらに、自分と他者の距離感の度合いに応じて他者を「隣人」「同時代人」「先人」「後人」に分け、それぞれの場合について他者理解の過程を考察した (Schutz 1932=1967: 142-214)。シュッツの他者理解論は、在韓・在日コリアン被爆者の日本や日本人との距離感や日本に関する認識形成の分析を試みる自分の研究にも応用できると思われた。

しかし、シュッツの理論を研究の理論的枠組みに採用して研究計画書を書いたものの、付け焼刃の知識でしかないのだから、自信は全くなかった。「社会学で研究するからには、こういうふうなことをしなければならないのだろう」という、見様見真似であったことを正直に告白せねばなるまい。社会学の素地が無く、ただし博士課程で探究したいテーマだけは明確であったために、それまでに漁って読んだ社会学の本のうち、テーマに合いそうだと直感的に感じたものがシュッツの他者理解論だったにすぎなかったのである。

入学試験での研究計画書に基づいた口述試験の際、試験官だった先生方(社会学者2人、歴史学者1人)がどのような印象を受けたのかは分からない。おそらく、社会学の基礎が無いことは見抜かれていただろうと思う。先生方から上がった質問には、「距離感」という括りで見える要素が分かりにくい、手記などから果たして「親近感」などのデータが得られるのか、といったものがあつた。確かに、「距離感」「親近感」「信頼関係」「共感」などといった内的、心理的要素をどのように測るのかという分析手法とも併せて、援用する理論としてシュッツの他者理解論には脆弱さがあつた。やはり、関心のあるテーマだけは明確だが、理論的素地の無い直感的な計画にしかなりえてなかったのだと、今でも思う。それでも、入学試験の結果は合格。晴れて博士後期課程の学生として研究を始められることになった。しかし、社会学の素地の乏しさは、この後も私を悩ませることとなった。

2016年4月に九州大学に入学し、久しぶりの学生生活が始まった。入学してすぐの頃、初めに指導教員になっていただいた直野先生から、まずは研究したい事を妥協せずに見極めるよう助言を頂いた。そうすることで、どんな資料を探せばよいか、どんなデータに重

点を置けばよいか（文献資料なのか、インタビューなのか）、なども分かってくる。理論的枠組みに関しても、問いの立て方によっては理論に依拠する度合いも変わってくるので、理論の勉強は継続しておいたほうがいいが、焦らなくてもよい、と言っていた。

資料調査やインタビュー調査、そして理論の勉強を継続する中で、まず研究対象と問いを再考した。前者については、個々のコリアン被爆者ではなく、在韓・在日被爆者の団体へと、対象を移すことを考えるようになった。コリアンであり、被爆者でもあるために、二重の差別を受けてきた彼らの多くは、コリアン被爆者であることを公にして自身の経験や考えを発信したり書き残したりすることを避けてきた。したがって、入手できる資料は多くなく、おのずと、被爆者団体とそのメンバーとして活発に活動してきた個人が発信してきたものに限られると思われた。また、調査を進める過程で、コリアン被爆者団体は、日本の被爆者および非・被爆者の市民団体と共に活動していることが分かってきたため、個人ではなく団体を対象に研究していくほうが日本人（団体）との接点を考察しやすいとも考えた。

問いについては、研究対象とする「現象」を再考した。入学試験時の研究計画で掲げた問いは、在韓・在日コリアン被爆者の日本に関する認識と、その形成に日本や日本人との距離感がどのように影響を与えたか、であったが、コリアン被爆者団体と日本の市民団体の協働関係が見えてきたことから、コリアン被爆者と日本人の間の長年にわたる接触・交流が、怒りや憎しみばかりではなく、協働関係という新たな結びつきを生んだプロセスの考察に変更することにした。もちろん、共に被爆者運動に関わったとはいえ、コリアン被爆者の側が協働する日本人に対して初めから信頼を持って接していたとは限らないし、今も怒りや憎しみと信頼の間で葛藤しているコリアン被爆者もいよう。さらに、関係者個人の回顧録などから読み取れる見解は時が経つにつれて変化している可能性もあるし、また現在の見解や心情が永続的なものであるとも限らない。したがって、コリアン被爆者団体と日本の市民団体の接触・交流がもたらした結果を示すことを目指すのではなく、むしろ、両者の協働のプロセスを考察し、困難や葛藤を経ながらも和解や共生へ近づく営みの一例として提示しようと考えた。

こうして、入学後半年ほどで、研究対象を個人から団体へ、そして、問いについても、コリアン被爆者団体と日本の市民団体がどのように協働関係を構築したかというプロセスへと軌道修正した。調査を進める中で、自分の疑問と探究心が向く事柄と、実現可能性（feasibility）を見極めていった結果の軌道修正であった。そして、それに伴い、援用する

社会学理論も再考しなければならなかった。

課題 2) 自分の研究に合う社会学理論を見つけよう

自分の研究で外せないキーワードを手掛かりに、探究したいテーマや問いに合いそうな社会学理論を見つける。

4. アイデンティティ論の可能性と限界

研究では、設定した研究テーマについてだけ熟知しているのでは当然ながら十分ではなく、関連するあらゆる事柄に幅広く通じていなければならない。私が東アジアについて初めて学んだのが英国でのことであったために、本から得た知識と実社会での経験の乖離があったことは先に述べたとおりだが、ここへきてもう一つ、大きな不足を痛感することになった。在日コリアンについての知識である。英国に住んでいると、彼らについて知ったり彼らと交流を持ったりする機会は、日本にいる時に比べて必然的にかなり少なくなる。私の場合、そのような機会は皆無であった。その後、広島に拠点を移してから九州大学に入学するまでに在日コリアンについて関心を持つ機会があり、彼らの近代から今日までの歴史を学ぶようになっていたが、入学後は、先行研究を読むなどして、学術的な観点からの学びも深め始めていた。

その過程で特に私の関心を引いたのは、在日コリアンの研究では最も重要な問題として論じられる事の一つといってよい、アイデンティティの問題であった。在日コリアンとは、広義では、朝鮮半島にルーツを持ち日本に在住する人たちを指し、狭義では、植民地時代に朝鮮半島から日本に渡り、解放後（日本にとっては戦後）も日本にとどまった人々とその子孫のことを指す。自身が日本に渡ったいわゆる在日一世たちの多くは、コリアンとしての民族意識を強く持ち、祖国の言葉にも通じ、特に解放直後にはいつか祖国へ戻るのだという思いを強く持っていた。しかし、その一方で、在日コリアン社会は祖国朝鮮半島の南北分断の影響をもろに受け、北と南のどちらの政権を支持するのかによって、自身を「朝鮮人」と呼ぶか「韓国人」と呼ぶか、北朝鮮の政権を支持する在日朝鮮人組織「在日本朝鮮人総聯合会」（朝鮮総聯）に属するのか、あるいは韓国の政権を支持する在日韓国人組織「在日本大韓民国民団」（民団）に属するのか、はたまた、自分が支持し属するのは北か南かという政治思想的二者択一そのものを拒否するのか、など、「在日コリアン」というアイデンティティの中身は、人によって異なるものとなった。そこに加えて、在日一世の子や

孫、つまり、日本で生まれ一生を過ごすことが珍しくなくなった二世、三世は、日本語の方が流暢だったり、祖国を訪れたことがなかったりする中で、一世たちとはまた異なる在日コリアンとしてのアイデンティティを模索するようになった。このような、在日としてのアイデンティティや生き方についての世代間の違いは、1970年代に起こった「第三の道」論争と呼ばれる議論において、とりわけ顕著となった（金 1979：55；Chapman 2008：37-59）。

在日のアイデンティティの多様化は、ここで終わらない。1945年の解放後に韓国から日本へ移住する人たちが増え、しかも、その人たちの間でも、いつ日本へ渡ったか、家族に日本人がいるか、どれくらい日本社会や日本文化になじんだか、日本語にどれくらい通じているか、など、さまざまな文化的違いが生じ、アイデンティティ形成にも影響する。こうなると、一口に在日コリアンといっても、その内部では多様化が進み、今日、在日のアイデンティティの問題の重要性は増し続けているといつてよい。

こうして在日のアイデンティティの問題について学びを深めるうちに、在日コリアン被爆者にとってもアイデンティティというものが大きな影響を与えているのではないかと考えるようになった。より具体的にいえば、ほかの在日コリアンにはない「被爆者」というアイデンティティが彼らの間での結束、また日本の市民との協働関係に影響を与えてきたのではないかと、という疑問がわいてきたのである。

その頃すでに、広島・長崎両被爆地の在日コリアン被爆者団体について調査を進めていた私は、彼らの運動とアイデンティティの関係について、次のような仮説に至った。広島の民団に属する在日被爆者たちは、韓国人として在韓被爆者の支援に乗り出した。広島の朝鮮総聯に属する在日被爆者たちは、朝鮮人として、日本にいる同胞に加えて在朝被爆者の支援にも乗り出した。同時に、広島でも長崎でも、同じコリアンの被爆者として互いに手を携えることもあったし、被爆者として、民族の違いを越えて日本人の被爆者や支援者と協力することもあった。一方で、「韓国人」「朝鮮人」といったアイデンティティや属性が協働の可能性を阻むこともあったし、さらにいえば、南と北、民団と朝鮮総聯など、ここに例示したような二項対立のカテゴリーが在日コリアンを規定する唯一のものではなく、これらのカテゴリーに単純に収まらない、彼らの間での多様性もあった。

アイデンティティに着目したら、在日コリアン被爆者だけで結構なボリュームの研究になるのではないかと。そう思った私は、問いにさらなる軌道修正をした。まず、研究対象を在韓・在日コリアン被爆者から在日のみに絞った。そして、援用する理論的枠組みを、

シュッツの他者理解論からアイデンティティ論、中でも特に、Tajfel and Turner (1979) が提唱した社会的アイデンティティ論に変更した。

社会的アイデンティティ論によると、人は社会的環境を分類・序列化する社会的カテゴリー化 (social categorisation) を行い、それらのカテゴリーと自身を照らし合わせて自身が属するとみなす社会的カテゴリーを見つけ、自己とそのカテゴリーを同一視する (Tajfel and Turner 1979 : 40)。つまり、社会的アイデンティティを形成するのである。こうして社会的アイデンティティが芽生えると、人はそのカテゴリーに行動規範を求め、感情的愛着を抱き、肯定的価値を模索する。あるいは、他グループに対する自グループの優越性を見出そうとしたり、自分たちの地位や価値を高めようとしたりする場合もある。一方で、社会的アイデンティティが芽生えたからといって、必ずしも他グループとの差別化や競争に向かうとも限らない (Brown 2000 : 753-760)。

在日コリアン被爆者たちはそれまでの経験から、解放後、コリアン被爆者として同胞支援という強い使命感を持ち、自分たちを含む在日・在韓・在朝コリアン被爆者救援のために奔走してきた。この過程において、在日コリアン被爆者という社会的アイデンティティは、解放後の彼らの運動を考察する際に有効な概念であると思われた。広島・長崎それぞれで彼らが団体を結成し支援運動を展開してきた中での対立の関係と協働の過程を、在日コリアン被爆者としての社会的アイデンティティを手掛かりに考察することで、一般的に南北 (民団・朝鮮総聯) の対立構図の中で語られてきた在日コリアンの歴史に、対立と共生の両方の可能性が秘められていることを示す。これにより、今後、日本社会において、在日コリアン同士あるいは彼らと日本人が共生の道を模索する際に、何らかの示唆を与えることができるのではないかと考えたのである。

入学からおよそ1年。相変わらず暗中模索ながらも、理論的枠組みが次第に定まってきたとの手応えを感じるようになった。調査を進めるうち、具体的に取り上げる事例 (団体) も決まった。この段階で定めたテーマ、問い、理論的枠組み、取り上げる具体的事例は、2019年に博士論文を書き上げるまでほとんど変わらなかった。比較的早い段階でこうして方向性を定められたことは、研究を順調に進めるにあたって良かったと思っている。

しかし、問いや理論に関して迷いや悩みが全くなかったかということ、そうではなかった。悩み続けたことの一つは、理論と実証研究のバランスである。社会学理論に対する苦手意識から、理論をどう援用するかという課題にとらわれすぎていたのかもしれない。博士後期課程1年目の後期開始時点で、直野先生が他大学に移られたため、三隅先生が指導

教員を引き受けてくださったが、この時期に三隅先生から、理論と実証研究のバランスについて助言を頂いている。具体的には、理論を検証する研究ではないので今は理論以上に調査に力を注げばよい、とか、「在日コリアン被爆者」というだけで特異性のある集団なので、理論は本編の要所要所や結章に織り込むなど、プラスアルファとして援用するやり方でもよい、といった内容である。

ただし、三隅先生の助言は決して「理論をおろそかにしても大丈夫」という意味ではない。あくまで、実証研究とのバランス、つまり、どちらにより比重を置くか、という問題にすぎない。実証ばかりの論文になってしまうと、それはジャーナリストのルポと変わらない。また、研究の道に進みたい場合は言うまでもないが、大学院で学んでいるからには「学問」をすべきであり、したがって、理論を援用したり新たな理論の提唱を試みたりするなどの学術的要素が乏しくなることがあってはならないだろう。そしてこれがもう一つの悩み、アイデンティティ論の援用方法とその妥当性という問題につながるのである。

アイデンティティ論の援用に関して三隅先生からは、社会的アイデンティティは本来、敵対的な集団間関係を説明する理論なので、その枠組みを協働関係構築の分析に用いるのであれば、少していねいな論理展開が望まれる、と留意点のご指摘を頂いた。同時に、アイデンティティ論で排除関係と連帯関係の複合的展開を考察するという点で、理論的にも実質的にもおもしろい、とも言っていた。

解釈によっては期待とも取れる三隅先生からのコメントだが、その「期待」を受けた当人は、まだまだ苦心していた。理論的枠組みをアイデンティティ論に定めたとはいえ、その理論を網羅的に学んで一夜にしてスペシャリストになれるわけではなく、したがって理論に対する苦手意識をすぐに払拭できるわけもなく、実証的な調査が比較的順調にいく一方で、その後もアイデンティティ論の援用方法に悩まされ続けた。

例えば、取り上げる事例の一つに、牧師の在日コリアンとクリスチャンであり医師でもある日本人が、市民グループを立ち上げて在韓被爆者への医療支援で協働したというものがあった。キリスト教信仰という共通項が彼らの信頼関係の構築や協働の実現にカギとなっていたと考えたが、それをアイデンティティとして論じることができるのか。人生をかけて取り組んだ職業（牧師、医師など）や活動（在韓被爆者支援）における使命感は、アイデンティティと同義ではない。となると、どのようにアイデンティティ論に関連させて論じられるのか。アイデンティティは一度確立したら確たるものとなるわけではなく変容する場合もあるし、新たに生じるアイデンティティも考えられるし、また、複合的なもの

でもあるのではないか。そもそも、本人でさえも「自分は何者か？」と問うことで初めて意識するようになるアイデンティティという内面的要素について、二次資料の読み込みや調査者との関係性が多分に影響を及ぼしうるインタビューで、どこまで迫れるのか。

さらに、在日コリアン被爆者団体を考察するための資料として、活動の主要な役割を担った中心人物たちの人物像やライフ・ヒストリーにも迫ることになるのだが、その過程で、一個人のアイデンティティにどこまで焦点を置くのか、複数の個人のアイデンティティを論じられるほどの資料を見つけられるのか、限られた数の中心人物を切り口に団体全体のアイデンティティについて論じることがどこまで可能なのか、といった問題も出てきた。つまり、アイデンティティ論の援用といっても、実際には個人的アイデンティティ、社会的アイデンティティ、集合的アイデンティティなど、異なる次元のアイデンティティに着目する必要が出てくるが、これらをどのように整理して論じられるのかという、アイデンティティの複雑さに加えて、多層性に関連する問題にもぶつかったのである。

理論的枠組みにアイデンティティ論を採用するとの方向性を定めたものの、「アイデンティティ」という概念がどこまでこの研究に有用なのか、どのように援用できるのか、という問題は、アイデンティティそれ自体が客観的に立証できるものではないがゆえに、そして本人でさえも把握し切れるとは限らないものであるがゆえに、次なる悩みとなった。博士後期課程2年目と3年目は、精力的に調査や執筆を進め、ゼミでの発表、国内外での学会発表、論文投稿なども積極的に行った。これらの研究成果発表の一つ一つは、研究を見直し、洗練する機会になった。しかしそのたびに、アイデンティティ論の援用方法と妥当性について悩み続けた。

課題3) 問いや理論の妥当性を再検討しよう

研究を進める間、理論と実証研究の間を行ったり来たりしながら、設定した問いを洗練し、援用する理論の妥当性を見極める。

5. 新たな視点と理論的枠組みの軌道修正

そんな中、博士後期課程2年目の後期に、アイデンティティに加えて新たなキーワードに出会った。それは「ナショナルな『境界』」（玄 2016 : 6）である。在日コリアン被爆者についての調査を進め、また在日コリアン一般についての学びを深めるうち、在日について論じる際に外せないもう一つの概念に「nation」があると考えられるようになった。それはひ

とえに、彼らが日本による植民地支配、解放後の民族分断、冷戦といった地政学的混乱に巻き込まれ、そのたびに引き直される実質的、概念的国境、つまり「ナショナルな『境界』」に翻弄されてきたからである。同時に、在日コリアン被爆者の運動において、nation という枠組みにとらわれまい、nation を越えようとする意志も見受けられた。彼らの運動は、「ナショナルな『境界』」がもたらすさまざまな制約を乗り越えて、日韓朝のコリアン被爆者を救援しようとする試みだったといえるのである。

そもそも在日コリアン被爆者は、「ナショナルな『境界』」に収まらない存在である。彼らは、旧植民地支配者と被支配者の境界に基づけば前者の日本人に対する後者のコリアンというカテゴリーに包摂されるが、そうすると在日コリアンであることが見えなくなる。日本人被爆者と外国人被爆者の境界に基づけば後者に包摂されるが、ここでも同様に在日コリアンであることが見えなくなる。さらに、居住地という地理的な境界に基づけば朝鮮半島に住む本国人に対して在日コリアンというカテゴリーに包摂されるが、この場合、在日コリアン被爆者であることが見えなくなる。このように、旧植民地支配者と被支配者（国家関係に基づく「ナショナルな『境界』」）、日本人被爆者と外国人被爆者（国籍や民族に基づく「ナショナルな『境界』」）、本国人と在日コリアン（居住地に基づく「ナショナルな『境界』」）という関係においては、「在日」「コリアン」「被爆者」という在日コリアン被爆者を括るカテゴリーのいずれかが不可視のものとなり、「在日コリアン被爆者」としての彼らの存在が埋もれ、切り捨てられてしまう。言い換えれば、在日コリアン被爆者は多重の境界をまたぐ存在なのである。

多重の境界をまたぐ在日コリアン被爆者の存在は、特定の境界、特に国家という枠組みの内側で形成された特定の言説や歴史解釈を解体し、新しい相対的視点を取り入れたもう一つの歴史を提示する可能性を秘めている。したがって、在日コリアン被爆者の特殊性に着目し、彼らのさまざまな運動の展開や成果や限界を考察することにより、「被爆者」「在日コリアン」「コリアン被爆者」といった在日コリアン被爆者を包摂する上位カテゴリーのレンズだけを通して見ていたら見落としてしまう、歴史に対する新たな視点を提示できると考えた。そして、在日コリアン被爆者の歴史を紐解き、一般的な被爆者運動や在日コリアンの歴史に新たな視点を加えられる。さらには、その歴史を東アジアの歴史の中に組み込むことで、各国のナショナル・ヒストリーに回収されがちな歴史対話を普遍的で未来志向の議論へと推し進める作業に何らかの示唆を与えられるのではないかと――。

このように考えて、目標とする博士論文完成時期まで残すところあと1年という時点で、

「nation」の概念や歴史認識問題との関連性を強調するなど、研究の問いをさらに練った。ただし、それまで判然としていないながらもしがみついていたアイデンティティ論との整合性がうまくいくのか、場合によってはますます泥沼にはまっていくのではないかと思われる、危険な賭けだったかもしれないと、今では思う。その危うさへの懸念は三隅先生もお持ちだったのか、先生からは、歴史に対する新たな視点を提示するという研究目的の組み換えは意欲的であるとしながらも、従来見落とされてきた歴史的視点としてどのようなことが相対化されるのかがまだ漠然としていることから、被爆者運動研究およびアイデンティティ研究としての枠組みを保持しつつ、包括的な落とし所として新たな歴史的視点を示唆するくらいにするなど、何らかのやり方で、今回の研究目的の組み換えをより具体的に示せるように、との助言を頂いた。

それからさらに1年後、三隅先生のいいないなご指導と寛大なお人柄に助けられながら、最終的に“「ナショナルな『境界』」に収まらない在日コリアン被爆者のアイデンティティ”を考察の切り口として、私はなんとか博士論文を書き上げ、学位を授与された。しかし、実は最終提出の直前になって先生に、アイデンティティ論の援用にはやはり限界があると思い始めたが、今さら引き返せない（一からやり直せない）ので、このまま突っ切るしかないと思う、というようなことを言った記憶がある。

結局、初めから最後まで理論的枠組みに悩み、しかも最後の段階で限界を感じるという始末であった。それでも、限られた時間の中でやり切った、書き上げたという達成感はあるにあり、博士論文自体に後悔はなかったのが救いだったといえるかもしれない。

博士号を取得して3年が経過した頃、この理論的枠組みの消化不良を解消する機会が巡ってきた。博士論文の書籍化である。博士論文は日本語で執筆したが、書籍は英語で出版することにした。英語での出版には利点が多かった。まず、コリアン被爆者については日本や韓国でさえもまとまった研究書が無いという、英語圏ではもっと知られていないテーマであるため、研究成果として大きな意義が期待できた。次に、英語で出版することによって、より多くの国・地域の読者に読んでもらえる可能性があった。（ただし、テーマを考えると日本語や韓国語で出すほうが需要はありそうだが。）そして、日本で出版すると、たいいの場合は費用がいると聞いていたが、それに対し、アメリカや英国で出版する場合は手出しの費用がいらない。このお財布事情は、著者にとってかなり大きかった。

企画を持ち込んだ出版社はアメリカの Lexington Books。この出版社は「Korean Communities across the World」というシリーズを出しているため、私の研究テーマであれば

アピールしやすく、出版後も同社が持つ販路や研究者とのネットワークから、**Korean Studies** に関心を持っている読者に広く知ってもらえる可能性が高くなるとも思ったので、今回の私の企画に合う会社だと考えた。幸い、提出した企画書と 1 章分の **sample chapter** が編集委員会で認められ、出版契約を結んだ。(出版社によっては、企画書提出後、査読まで経た後で契約を結ぶ場合もある。) それから 2 年間、博士論文の翻訳、博士論文からの大幅な加筆・修正(結局、全体の半分くらいは変わったと思う)、2 度の査読と修正、ゲラ校正を経て、2024 年 11 月 25 日に刊行となった(Takahashi 2024)。加筆・修正の段階では、本編となる在日コリアン被爆者運動の事例を論じた章を、博士号取得後に行った追加調査の結果を盛り込んでさらに充実させ、歴史的背景を詳述した 2 章も加えた。それ以上に大幅に手を入れたのは、序章、各章の結び、そして終章の、理論的議論の部分であった。

先述のように、博士論文ではアイデンティティ論を援用して考察したものの、理論的枠組みとして危うさがあった。その後、最後の段階になって「ナショナルな『境界』」というキーワードを補助的に取り入れた。そして最終的に、在日コリアンが「日本」「韓国」「北朝鮮」といった「ナショナルな『境界』」に収まらない存在だからこそ、独自の思想と運動の展開を見せ、同時に「ナショナルな『境界』」に翻弄され続けたことを、境界をまたぐ彼ら特有のアイデンティティを切り口に論じた。

これに対して書籍化の際には、しっかりと論じるべきは、運動におけるアイデンティティの作用ではなく、むしろ「ナショナルな『境界』」にもつながる「**nation**」という概念ではないかと考えた。彼ら特有のアイデンティティは、「ナショナルな『境界』」をまたぎ、同時にこれらの境界に翻弄させられたという、東アジアの地政学的混乱の所産である。混乱の具体的要素には、近代以降の植民地主義、帝国主義、冷戦があり、この地政学的環境の中で、域内各国でさまざまなナショナリズム(**developmentalist nationalism**、**economic nationalism**、**patriotic nationalism**、**long-distance nationalism** など)が醸成された。この地政学的環境こそを前景化し、特にさまざまなナショナリズムを分析のカギとなる概念に採用して在日コリアン被爆者の運動の展開を論じるほうが、学術的により堅実で説得力ある議論ができると考えるようになったのである。

そこで、書籍用の原稿では、理論的枠組みを提示する序章からアイデンティティ論を削除し(本編の考察の中でアイデンティティに言及する箇所はあったが)、日本の植民地主義、日韓朝および在日コリアン社会で醸成されたさまざまなナショナリズム、そして冷戦を、コリアン被爆者の運動の性格や方向性に影響を与えた要素として論じた。まず序章で、こ

れら3つの要素についての議論を強固にしたのだが、中でもナショナリズム論を主たる理論的枠組みに据え、最も多くのページを割いて論じた。そして、各章や終章での考察では、序章で提示したさまざまなナショナリズム（および植民地主義と冷戦）が在日コリアン被爆者の運動にいかに関与したか、彼らがそれをどのように運動に反映させ、あるいはどのような制約を受け続けたか、といったことを論じた。

博士論文の時とは異なり、書籍では、在日コリアン被爆者団体やその中心人物のアイデンティティよりも政治・社会的文脈への視点を強調した。これにより、アイデンティティ論を援用することの危うさを克服できた。同時に、博士後期課程終盤で議論に取り入れた「ナショナルな『境界』」というキーワードを「ナショナリズム」というより広い概念にまで広げて組み込んだことで、在日コリアン被爆者が「ナショナルな『境界』」をまたぐ存在であることや、それゆえ彼らの運動に見られる特徴やダイナミクスを、より明瞭で効果的に、全体を貫く議論へと発展させることができたし、考察の説得力も増したと思っている。私の論に対する批判的意見を持つ読者もきつというであろうが、私としては博士論文を提出した時の消化不良を克服できたし、少なくとも今の私の能力の限界値まではやり切ったと思えるものにできた。博士後期課程の時から悩み続けてきた理論的枠組みの問題が、私なりに解消できた。これで本当の「修了」である。

6. むすび

博士後期課程入学準備から書籍化までの道のりをあらためて振り返ると、研究テーマや問いについては、多少の軌道修正はしたものの大きくぶれたり悩んだりすることはなかったと思う。私が最も苦心したのは、理論的枠組みの設定だった。それはひとえに、私に社会学の素地が無いからであった。

理論的枠組みを定めるにあたって、研究テーマについての学術的学びを深め、その過程でカギとなる概念を見つけ、それに関連する社会学理論を探した。この暗中模索の地道なプロセスは、社会学の素地がなかった私にとっては、やむを得なかったといえる。私の反省点はむしろ、問いと理論の組み合わせを事あるごとに確認し、必要であれば思い切った軌道修正をすべきであったということである。

入学後の早い段階で、アイデンティティ論を理論的枠組みに採用することにした。その後、資料の限界なども考慮した結果、研究対象を個人から被爆者団体（およびその中心人物）に移した。当時は、社会的アイデンティティをはじめ、さまざまな次元のアイデンテ

ィティの概念を用いることによって、団体の考察にもアイデンティティ論は有効であると考えていた。しかし、在日コリアン被爆者にとってアイデンティティが重要な問題であるということと、この研究プロジェクトにおいてアイデンティティ（論）が有効であるということは、別の話である。このことに早く気付いて、研究対象を個人から団体へと移した段階で、アイデンティティという個人の内面により強く関わる概念を理論的枠組みとして採用すること、つまりこの研究にとってのアイデンティティ論の妥当性を、じっくり再考すればよかったのかもしれない。しかし私は、あくまで団体や中心人物のアイデンティティを切り口に在日コリアン被爆者団体の運動を考察しようと研究を進めた。その結果、博士論文提出間際になって研究手法の危うさと限界を感じる始末であった。数年経ってからではあるが、この時の消化不良を解消する書籍化という機会を得られたのは、幸いであった。

研究を進める過程で、理論と実証研究の間を絶えず行ったり来たりしながら、設定した問いと理論的枠組みを繰り返し再検討すべきである。そして、その妥当性に疑問が生じたり限界を感じたりしたら、思い切った見直しをする勇気も必要だろう。もちろん、軌道修正の必要性に気付いたのが遅い段階であれば、焦燥感に駆られたり、慌てふためいたり、束手無策で途方に暮れたりしてしまうかもしれない。その場合はそれまで積み上げてきたものを白紙に戻すことが必ずしも賢明な判断とはいえないが、それでも、理論的枠組みは研究の基礎部分である。できる範囲でもよいから軌道修正を試みたほうが、長い目で見たらより良い、より満足できる研究成果につながるのではないだろうか。もっとも、一番良いのは、できるだけ早い段階で軌道修正ができることであるのは、言うまでもないが....。

文献

- Brown, Rupert, 2000, "Social Identity Theory: past achievements, current problems and future challenges," *European Journal of Social Psychology* 30: 745-778.
- Chapman, David, 2008, *Zainichi Korean Identity and Ethnicity*, London and New York: Routledge.
- Schutz, Alfred, 1932=1967, *The Phenomenology of the Social World*, translated by Geroge Walsh and Frederick Lehnert, Evanston, IL: Northwestern University Press.
- Tajfel, Henri, and Turner, John, 1979, "An Integrative Theory of Intergroup Conflict" in W. G. S. Austin and S. Worchel eds., *The Social Psychology of Intergroup Relations*, Monterey, CA: Brooks/Cole, 33-47.

Takahashi, Yuko, 2024, *Korean Nuclear Diaspora: Redress Movements of Korean Atomic-bomb Victims in Japan*, Lanham, MD: Lexington Books.

金東明, 1979, 「在日朝鮮人の『第三の道』」『朝鮮人』 17: 29-64.

玄武岩, 2016, 『「反日」と「嫌韓」の同時代史——ナショナリズムの境界を越えて』 勉誠出版.